香誉祐海の「勧修百万遍十界一心願生西方作福念佛図説」について

巖谷勝正

はじめに

「心」という文字を中心に十界を描いた「円頓観心十法界図」と呼ばれる図画が、江戸時代にかなり流布したことが知られている。腮尾尚子氏の指摘[1]によれば、もともとは『摩訶止観』の所説に依って描かれた天台の教義を表したものである。後に『華厳経』の「若人欲了知」の文が付加され、心内に十界があり心を省みることの重要性が説かれてきた。

また、この「円頓観心十法界図」に浄土教義を取り入れ印施された例も腮尾氏によって紹介されている。その「円頓観心十法界図」（以下、「十法界図（唯心浄土）」）には、百万遍念仏の普及勧化に利用された文言が記され、図にも各界を区切る界線が連珠の円で示され、念仏を唱える毎に、塗りつぶしていくようになっている。このように本来天台教義を伝えるべく図された「円頓観心十法界図」は浄土教へも受容されていった。

今回解釈を試みる「勧修百万遍十界一心願生西方作福念佛図説」（以下「作福念佛図説」）は、「円頓観心十法界図」を浄土教の中に受容し、さらに百万遍念仏を勧めるために図されたものである。この「作福念佛図説」の紹介もすでに腮尾氏がゴルドン文庫所蔵のものについてなされており、本稿では、その構成と教義的意義について考察を進めたい。

一　「十法界図（唯心浄土）」について

最初に、「円頓観心十法界図」をそのままに黄檗宗系と推測されるが、浄土教的に解釈した「十法界図（唯心浄土）」についてその勧化文の一部を引用しておく。

冒頭に「若人欲了知」の文を引き、仏心を起こしても一念に悪心を起こせば地獄と変じ、仏界も地獄もただ心の善悪に在ると説く。そこまではこの図の意図するところの説明である。その後に付け加えて浄土教的解釈を加えている。

極楽往生を遂ることは此十界の図の道理を信するより至要なるはなし　既にそれ吾一心に十界三千の法を具すと信すれは十万億土の外の安養も吾か心内の浄土なれは誓願は此の唯心の浄土に生せんことを願ひ信願已に導きて行する所の念仏は我か本性の弥陀如来なれは図の道理を信せは是真の融通念仏にして其功徳甚た深く其利益至つて広し[2]

このように、図を利用しながら百万遍を勧めつつも唯心の浄土を説いている。

二　「作福念佛図説」の構成

目黒にある祐天寺を起立した香誉祐海（１６８２　～１７６０）が享保年間に制作した「作福念佛図説」には、上半分に「当麻曼陀羅」の略相が画かれ、下半分に「円頓観心十法界図」を配す。この「円頓観心十法界図」は閉じた円になっておらず、中心には円形の二河白道図、右上に六方諸仏諸菩薩諸天善神、左上には白毫から光を放つ弥陀来迎図と浄土宗義を表す重要な図が画かれている。

まず上半分の「当麻曼陀羅」であるが、「当曼中台三尊略相」と題され楼閣の弥陀三尊の仏前に上品上生と書き、蓮池の右に上品中生、中三品、左に上品下生、下三品と文字書きされている。これを「宝池九品生ノ略」とする。この蓮池の中央に光を放つ「心」の字が蓮台に画かれる。その蓮の茎を下にたどっていくと、下の「十界図」に繋がっている。その茎の先には、増上寺第三十六世顕誉祐天の名号（いわゆる早書き名号）を模写したもの[3]があり、その名号の下には「願往生」と書かれ、その下に円形に画かれた二河白道がある。二河白道円の上半分は白道で、下半分が此土を表している。その白道に「一心」とあってその此土すなわち娑婆世界にまた十界が線で繋がっているという縦の繋がりで図が画かれている。

三　図の制作意図

この図はあくまでも作福念仏図であって、観心のための

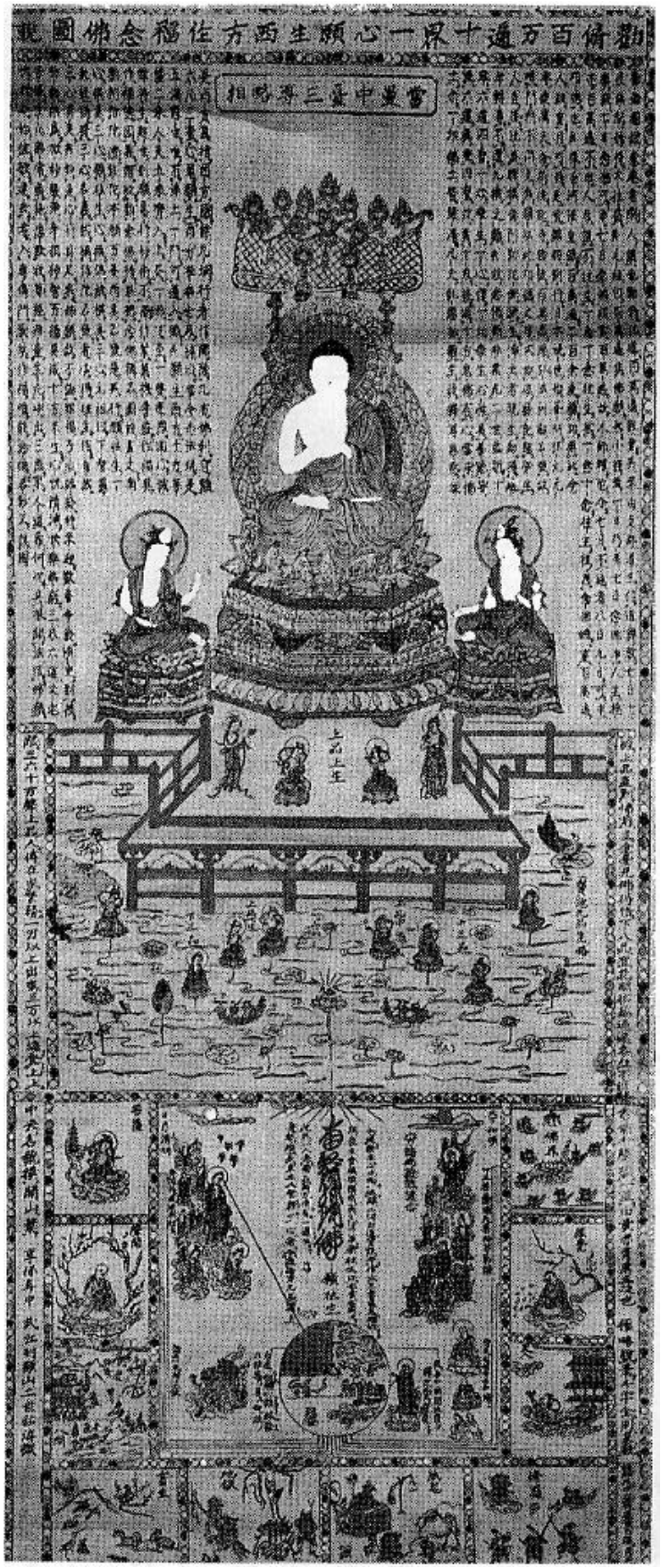

図 1　観修百万遍十界一心願生西方作福念佛図説

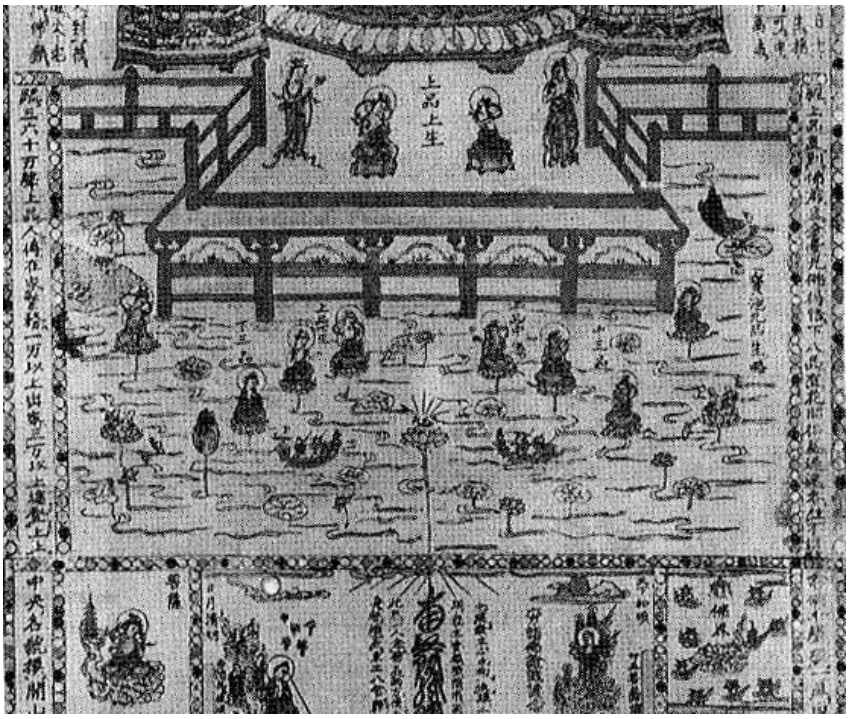

図 2　図 1 の中央部分

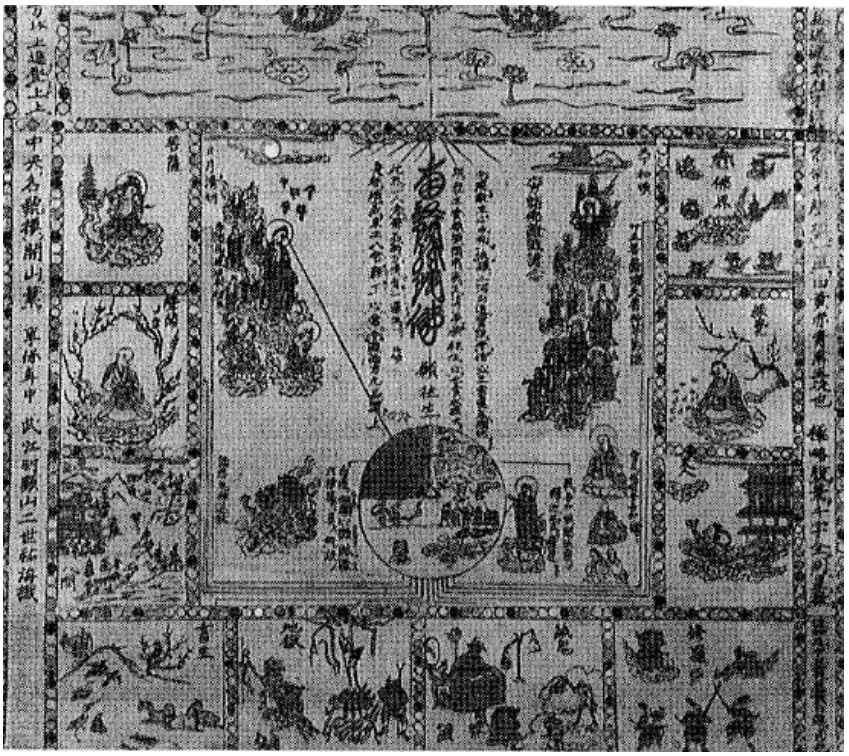

図 3　図 1 の下段部分

ものではない。祐海はある人の請いに酬(こた)えるために画いたとするが、もし百万遍を勧めるためのものであればわざわざ通仏教的、天台的な十界図を画く必要はない。『往生要集』による解釈でも地獄と極楽の世界で十分説明されると思われる。しかしながらここで問題となっているのは、命終後の世界としての地獄と極楽の対比という概念と、今在る自己すなわち現世の心中の地獄と仏界の対比の概念が一般の信者にとって非常にわかりずらく、混乱して受け取られているという事実であり、それがこの図を画かせた理由であると推測できる。事実、先に紹介した「十法界図（唯心浄土）」は自己の心中に弥陀の世界を置いて説明しており、法然浄土教としては看過できない問題がある。この図はそのような混乱を正そうとする一つの試みとして画かれたものと見ることができよう。

四　此土にある十界

天台の説く地獄極楽は「一心具十法界」[4]の世界であり、心の働きが重視される。六凡四聖も人の煩悩の断不断、すなわち修行の成果を言うものであるから人の心の働きと解すことができる。

一方、六道輪廻の世界では生死を繰り返し、現世の因が後世の果となる。浄土教に於いても現当二世を問題にする以上、ここには時間差が生じる。従って現世の心として十界図が画かれている以上、これを浄土教的に解釈しようとしても、自ずと無理が生じる。祐海はその矛盾を無くし、此土での十界図と此土での心行の図と往生浄土の果をこの一枚の作福念仏図で表現しようとしたのである。

まず、此土の世界にあたる十界図から見ていきたい。天台の説では、心を中心にした円を十界に分け画かれるが、祐海の十界図では上部を開けて中央に円形の二河白道図を置き、その周囲に十界を配置している。二河白道の円の下半分に今まさに生きている自分のいる此土が画かれていると解釈することができる。その二河白道の此土の世界に周囲に画かれた十界が線で結ばれており、この此土すなわち穢土にも仏界があり地獄があるという絵になっている。[5]

この世界は、自力修行の世界であり、聖道門の世界と解釈できる。そして二河白道の円から上方へ往生浄土への道が繋がっているのである。この二河白道の円が「円頓観心十法界図」の「心」に相当しているものと考えられるが、

人の心に自力の十界をめぐる道の他に他力往生の道を表現したのがこの図の特徴であり、意図しているところである。その二河白道図の白道の中央に「一心」と画かれていることからも理解されるところである。

五　一心の解釈

この一心については、この図の勧化文にも次のように記されている。

一心トハ衆生ノ一心ナリ（中略）願往生ノ一心トハ横具ノ三心ナリ願ニ往生ヲ心無ケレハ偽リ疑ヒ横ニ具スニ三心ヲ元祖ノ曰ク下智愚鈍ノ輩ハ猶シ暗シニ三心ノ名義ニ然称ニ弥陀ノ名号ヲ者ノハ必ス得トニ往生ヲ信スレハ自然ニ三心具足スト

衆生の心性には善悪ともに有って、十界を貫き鬼仏は心に有るとも述べ、乱想の凡夫は仏土を求めてもその仏土には生じ難いという。そのような凡夫のために説かれたところの浄土の一門のみあって通入すべきとの道綽の文句を挙げ、願往生の一心をもって横具の三心とした。

絵図を見ると、一心の左右、此土と二河の境に「善悪性具」と書かれている。これは一心（願往生心）を持たない衆生が二河に落ちんばかりにさまよっていることを暗示しているように見える。一心を持っている人は、二河白道を渡るのであるが、その白道の先には一心の内容である「願往生」と書かれ更にその上に六字名号が書かれている。これは願往生の一心を横具の三心とし、称名を行としてその上に画かれた九品蓮台に往生することを表しているものと見ることができる。

六　念仏の行者を守るもの

二河白道の円の外にも様々な絵が描かれ、これらは皆念仏の行者を守るものとして存在している。まず右側に撥遣教主の釈迦如来の姿が、「遇テ善知識ニ聞法発心釈迦ハ此方ヨリ撥遣シ玉フ」という言葉とともに画かれる。その更に右側に「僧及ヒ信男女善知識」、左側に「白道細（ホソキハ）願心微賊獣（ジウ）六根等ナリ具ニハ如シ疏ノ」とあり、その左に「諸悪鬼神退散」とある。

そして、この二河白道の円に左上より、弥陀の来迎図が画かれ、白毫からは光明が降り注がれている。右上には、「六方諸仏証誠護念」「廿五菩薩諸天善神等影護」とあり、六方の諸仏から諸菩薩諸天善神に至るまで影の如くに行者を護

る姿を表している。

これは、まさに念仏の現益として捉えられているものであり、十界図にこの二河白道を渡る行者の心行それに弥陀の来迎、六方諸仏の護念を含めて、現世の世界が画かれている。

七　往生と百万遍

下半分の此土すなわち現世の世界より念仏を通じて弥陀極楽世界の宝池の蓮台へと導かれる。その往生の果について、両脇に次のような言葉が記されている。

右に「経ニ上品ハ直ニ到テ仏前ニ生金台見仏得悟ス下八品ハ有リ花開得益遅速一各ノ住ニ不退一」、左に「疏ニ三六十万声上品ノ人ナリ伝ニ在家繁務ハ一万以上出家ハ三万以上進メテ登ラシム上上一ニ」とある。いずれも経疏を取意して述べられているものと思われる。

右は、上品上生では、すぐに見仏して悟りを得て、その他の八品でも遅速はあるが不退に住すとあり、左には、三万六万十万は皆これ上品人であるという善導の釈[6]と、伝としての在家でも一万遍の日課を果たすものは上品上生に登ることを示している。

おそらくはこの念仏の数を出して、勧修百万遍としているのであろう。百万遍については、法然上人の法語（「百万遍の事」『往生浄土用心』[7]）や百万遍知恩寺の由緒を引いてその勧めるいわれを勧化文に明示している。

また、十界図の右に「念仏千声填ニ一星ヲ白黄赤青黒五次也」とあって、図の境界線の代わりに小珠がめぐらせてあり、すべての小珠を塗りつぶすと百万遍になるように画かれている。

願往生の心をもって、日課一万遍を保つものは上品上生して弥陀の仏前の金蓮台へまっすぐに生まれることができるとしている。

ここで、蓮台の上に注目すると、光輝いているように「心」という文字が画かれている。これは、「円頓観心十法界図」がもともと「心」という文字を中心に説明している図であることから、その延長上に浄土教を説明しようとした本図の矛盾が出ているように思われる。一見すると往生するものとして行者の心があるように思える図であるが、勧化文の冒頭に「勧修図説ノ意趣ハ者酬ニ人ノ請一也」とあることから、どうしても「円頓観心十法界図」にある「心」を説明

するために、どこかに画かねばならなかったようにも感じられる。ただし、教義上の疑義はぬぐえないのは事実であろう。

八　再び一心について

祐海は自己の著述[8]の中で、「一心は諸宗にもあるがみな心内の心性のことを言い、一心をみがき一心を明らかにすることを目標としている。しかし、浄土教においては『阿弥陀経』の「一心不乱」にあるように、心外に法を求め浄土を求める。これはひとえに凡夫の機根による」と述べ、さらに

我か一念の下に地獄あり、一念の上に浄土あり、悪念を発せば地獄ゑいたり、善念を越は浄土にいたる、此二つののもは常にこころに随って相離す

と現世の心内に十界を認めている。次に

かりの世の果報をたのむは地獄にちかし、常住の果報を求むは浄土に近し、しかあれは此の一心に地獄もあり浄土もあり、然るに仏果を求るに釈尊一代の御報を道綽禅師聖道浄土の二門に分ち給ふ

と、当来する仏果を求める一心にも地獄と浄土があることを述べている[9]。まさにこの「作福念仏図説」に込められた思想がここにあると思われる。心内の浄土から心外の浄土への転換を巧みに表現した図ということができ、その往生願に対し百万遍という行を併せ仏果を成就させるための図として捉えることができよう。

おわりに

本稿のきっかけとなったのは、腮尾氏が平成十二年六月に祐天寺に参詣され早稲田大学図書館ゴルドン文庫所蔵の「勧修百万遍十界一心願生西方作福念佛図説」を紹介してくださったことにある。その後祐天寺檀徒個人宅にも同様の掛け軸を毎年お盆に掛けておられることがわかり、比較する機会を得た。

両者が同一の版木を用いているかどうかという詳細な検討はできていないが、ゴルドン文庫蔵のものは彩色され、特に名号と一心、心という文字が金文字で画かれていることがわかる。いずれも「祐天寺蔵板印施」と記されており、彩色を違えたものであることもわかった。

蓮台上に画かれた「心」という文字に教義的な問題を残すとはいえ、百万遍の弘通を目的に多く刷られたことが推測され、江戸時代中期にもまだ心内の仏界と心外に浄土を求めることが問題にされていたことの証拠でもある。また稿を変えて論じてみたいと思っているが、祐海著述の『愚蒙安心章』の内容とこの図の関連も多くあり、祐海の長年に培われた思想がこの図に込められていると考えて良いと思う。

最後に、資料を提供くださった腮尾尚子先生、島崎勇次氏に感謝いたします。

注

（1）腮尾尚子「『円頓観心十法界図』について―図の源流をめぐって」（『絵解き研究』第十五号 18頁）

（2）漢字仮名遣いは筆者が改めた。

（3）十界図の左側に「中央名号模開山筆享保年中武江明顕山二世祐海識祐天寺蔵板印施」とある。

（4）『摩訶止観』（『大正蔵』四六巻五四頁上）

（5）聖冏は『釈浄土二蔵義』（『浄全』十二巻一七八頁）において十界互具の義を認めており、宗義上「深信因果」において十界をめぐる因果を信じることも含まれる。

（6）『観念法門』（『浄全』四巻二二四頁上）

（7）『昭法全』五六〇頁

（8）「心外に法を求め西方往生を勧る事」『愚蒙安心章』（祐天寺蔵）

（9）「抜語教誡」『愚蒙安心章』（祐天寺蔵）